

自動詞使役形の用法

川端 芳子

1. はじめに

自動詞には「起きる、集まる」のように対応する他動詞「起こす、集める」を持つ有対自動詞と、「走る、泳ぐ」のように対応する他動詞を持たない無対自動詞がある。無対自動詞の場合、使役形を用いて他動詞の代わりとするが、使役表現と他動詞の用法には類似点がある。

(1) 百メートルのタイムを計るためにコーチは選手を走らせ
た。(使役)

(2) 私は趣味のドライブで、よく海岸まで車を走らせる。(他動詞)

(3) 事故の知らせを聞いて、彼はその現場までタクシーを走
らせた。(他動詞?使役?)

(1) は使役者(コーチ)から被使役者(選手)への指示であり、走る人(動作主)は被使役者の選手である。しかし、(2) は私が車を運転する意であり、無情物の被使役者(車)への指示

とは言えない。したがって、使役形を用いた自動詞「走る」の他動詞と考えられる。また(3)は、使役者(彼)がタクシー運転手に命じて被使役者(タクシー)を走らせ現場まで行ったという意味であり、他動詞か使役表現か判断が難しい。

一方、有対自動詞にも自動詞使役形が存在する。

(4) 多くの親の願いは、一言で言えば子供をいい大学に入ら
せるといこと。(教育再生!)

(5) (今の時期は)本来なら、核入れした具を沿岸部で3週
間ほど休ませてから沖に運んだ後の時期。

(6) (鷹匠は)タカを手に止まらせて毎日約2キロ散歩し、
途中で餌をやり、「人の手に乗る」ことはすなわち「いいこ
とがある」のだと教え込んだ。(読 二〇一七・四・一七)

それぞれに「入れる」「休める」「止める」の有対他動詞があるが、置換が可能な場合もそうではない場合もある。無対自動詞では使役形のみであるのに対し、有対自動詞では使役形と他動詞が存在するのである。では、有対自動詞の使役形は何を表し、他動

詞とどのような差異があるのだろうか。本稿では、具体的にいくつかの有対自動詞（以下「自動詞」という）使役形を取り上げ、その用法を考察する。¹⁾

2. 先行研究と疑問点

2. 1 青木（一九七七）と許（二〇〇九）

青木（一九七七）は他動詞について「客体の意志・主体性を全く没却している。故に、本来意志や主体性をもたぬ物体（≠非情物）を客体とする場合に最も適した表現であり、それを、人間が客体である場合に用いるならば、それは客体の意志・主体性を無視した、人間味のない表現となり、或る場合には高圧的雰囲気さえ生ずる」（114頁）と述べている。

一方、許（二〇〇九）は日本語母語話者に対して自動詞使役形と他動詞の二択で選択する調査を行った結果、話者によるゆれが観察されたとして、(7)を例に挙げ説明している（233頁）。

(7) もともと、女性を土俵に上げられない理由は、「伝統」という言葉だった。そしてそれでは説得しきれないという時代の流れを、女性の就任は再認識させてはくれた。しかしそこまでされるとなおいっそう、疑心暗鬼になってしまふのは私だけだろうか。そうまでして女を土俵に上げない理由はなんだ？と。

（朝日二〇〇〇年09月19日朝刊）

許（二〇〇九）は、この「上がらせない」と「上げない」を「一人の話者でも表現のゆれが存在する」例だとしているが、果たしてそうであろうか。(7)において「女性」を「土俵に上げ

らせない」理由が社会的（伝統）であると述べているのに対し、「土俵に上げない」では「女性」ではなく「女」を使い、「そうまでして女を土俵に上げない理由はなんだ」と「私」の疑念を強く述べている。これは、青木（一九七七）が他動詞について述べた「客体」（≠女）の意志・主体性を無視した「高圧的雰囲気」を効果的に伝えている表現だと思われる。

確かに、この効果がすべての用例に当てはまるわけではない。

(8) 「北島さんを手ぶらで帰らせる（帰す）わけにはいかない」。競泳男子400メートルメドレーリレーの松田丈志は仲間と誓い合った。（朝 二〇一六・九・三）

(8) の「帰らせる」を「帰す」に置き換えても「北島さん」に対して「高圧的雰囲気が生ずる」わけではなく両者は、ほぼ同意と考えられる。

しかし、次の(9)「帰す」を「帰らせる」に置き換えると不自然な文になる。

(9) 家族会の飯塚繁雄代表は「北朝鮮から『日本人拉致被害者を帰す（*帰らせる）』という約束があった後に訪問して、詰めをしていただきたい」と語った。

（読 二〇一八・六・一四）

(9) において、「帰す」が妥当であるのは客体（日本人拉致被害者）の意志、主体性が「帰る」ことに関与しておらず、青木（一九七七）の言う「客体の意志・主体性を無視した、人間味のない表現」に相当するからであろう。

また、許（二〇〇九）は「帰る」と「帰らせる」の区別が簡単にはできない例として(10)を挙げ、両者が「違う動作でなければ

ならないかということ、決してそうではない」(252頁)と述べている。

(10) a. また、同市岡の県立伊東東高校と、同市八幡野の県立伊東城ヶ崎高校もこの日は期末テストだったが、3時間だけで切り上げ、「家出被災復旧を手伝うように」と、生徒を家に帰した。(朝日 一九八九年七月十日夕刊)

b. 子どものゆとりを確保するため、勉強は授業のみで、宿題はいつさいなし。教科書は学校に置いて帰らせ、家庭学習もさせないという。(週刊朝日二〇〇四年05月28日)

この用例は大変示唆的である。確かに動作という点では同じであるが、b. を「置いて帰す」に言い換えることはできない。「先生」が「生徒が教科書を置いて帰る」ことを「させる」からである。「教科書を置いて帰す」にしてしまうと、「教科書を置く」のは生徒で「帰す」のは先生となり、動作主体が一致しなくなる。つまり、「置いて帰る」のような動詞の連続と「持ち帰る」のような複合動詞においては、他動詞「帰す」に置換できず、「置いて帰らせる」「持ち帰らせる」としなければならぬ。これは自動詞使役形が必要不可欠である理由の一つであると考えられる。この点については4・で述べる。

以上のように、自動詞使役形と他動詞は、意味を変えずに置換できる場合とそうではない場合があり、両者の類似点と相違点は複雑である。

2. 2 庵 (二〇〇一)

庵 (二〇〇一) は「立つ／立てる」「入る／入れる」のように

自動詞と他動詞が対応している場合、ヲ格が意志を持つ名詞ならば原則的に自動詞使役形を用いるとして、次の例を挙げている。(138頁)

(9) 先生は順番に生徒の名前を呼び、一×立たせた(他)／○立たせた(自使)。

(9) では「生徒〓意志を持つ名詞」であるから自動詞使役形を用いるということである。しかし、実際の用例では、ヲ格が意志のない名詞の例も見られる。

(10) 太もも付近にできる血栓は、足の血管を詰まらせることがある。(読 二〇一八・八・四)

(11) キノコを焼くことで、香りを立たせるのがコツです。(広報いず)

(12) わたしは射ちに射ったが、一本の塚にひびを入らせることもできず、朝の五時にはまったく同じ事を考えながら(略)

(10) (11) (12) のヲ格は意志のない名詞であるが、自動詞使役形と共に起する。また、(10) は他動詞「血管を詰める」とは言えないが、(11) (12) は「香りを立てる」「ひびを入れる」が可能である。つまり、自動詞使役形か他動詞かの選択基準は、対象が意志を持つ名詞か否かだけではない。例えば「立てる」には「起立する」意がなく、また「人を立てる／人が立つ」では、「看板を立てる／看板が立つ」のような因果関係(看板を立てた、その結果、看板が立った)を表すことはできない。他動詞にその意味がないからこそ、「立たせる」(起立させる)という自動詞使役形が必要なのではないだろうか。

このことから、自動詞使役形の用法を考察する上では、形態的に対応している自動詞・他動詞が語義的にもその対応を持つかを検討することが重要だと言える。

そこで、3. では形態的に対応している自動詞と他動詞の対について自動詞の語義に他動詞が対応しているかという視点から、自動詞使役形の用法について考察したい。²⁾

3. 語義的対応による使い分けと互換性

他動詞において自動詞の語義に対応するものがあるかという視点から次のような分類を試みた。

3. 1 . 他動詞に語義的対応がある場合↓自動詞使役形と
他動詞を用いる
・他動詞に語義的対応がない場合↓自動詞使役形を用いる

3. 1. 1 「立つ・立たせる／立てる」

「物がまっすぐに存在する」意の「看板が立つ／看板を立てる」、「はつきりと表れる」意の「波風が立つ／波風を立てる」は、他動詞に自動詞に対応する意があるため(13)(14)のように自動詞使役形と他動詞が使用できるが、(15)(16)の「起立する」意は他動詞にはないため(一人が立つ／*人を立てる)、自動詞使役形が使われる。

- (13) (写真の甘鯛は)熱い油をかけて鱗を立てせる(立てる)
若笹づくりという手法を用いており、見た目の豪快さと歯応えが楽しめる。
(Hanako)

- (14) 彼の従業員の感情に多少の波風を立てせて(立てて)しまう。
(恋人よ)

- (15) 『続氷点』は、物語の終末を網走に設定し、流水原にヒロイン陽子を立てせて(*立てて)いる。
(流水)

- (16) 自分が疲れていても、お年寄りを立たせた(*立てた)ままというのには居心地が悪いのです。
(読二〇一五・八・二)

3. 1. 2 「回る・回らせる／回す」

「円をえがくように動く」意の「コマが回る／コマを回す」、「今までとは別の方面に移る」意の「選手が守備に回る／選手を守備に回す」は、他動詞に自動詞に対応する意があるため(17)(18)のように自動詞使役形と他動詞を使用できるが、(19)(20)の「あちこち歩く」意は他動詞にはないため(部長が営業先を回る／*部長を営業先を回す)、自動詞使役形が使われる。

- (17) テニスボールを2本の楊枝でちよんちよんつつつきながら、苦勞して醬油入れの周りを回らせよう(回そう)としていたのです。
(親と幼児の運動会)

- (18) 秋本が積極的に技を仕掛け、相手を(柔道の)受けに回らせる(回す)展開で迎えた1分50秒過ぎ(略)。
(読二〇一一・一一・一一)

- (19) 二人の下僕に松明をもたせ、居室の周りを回らせた(*回した)。
(ベストの文化誌)

- (20) 顔見知りの役員が「いやあ、かすかですが、確かに聞こえますよ」(中略)外のどこかの物音のようでした。ということでは若い連中に近くの家を確かめに回らせて(*回して)

いたら、ワン・ブロック離れた環八に面したレストランの屋上に(略)。(老いてこそ人生)

3. 1. 3 「渡る・渡らせる／渡す」

「所有が一方から他方に移る」意の「相手にデータが渡る／相手にデータを渡す」は、他動詞に自動詞に対応する意があるため(21)のように自動詞使役形と他動詞を使用できるが、(22)「入を通る」(23)「隔たった所に行く」意は他動詞にならないため(一人が横断歩道を渡る／*人を横断歩道を渡す)、*弟が外国に渡る／*弟を外国に渡す)、自動詞使役形が使われる。

(21) 化学兵器は二度と使われてはならない。国際テロ組織の手に渡らせない(渡さない)ためにも、国連を主体に今回の事件の調査を急ぐべきだ。(朝 二〇一七・四・一四)

(22) この腰の重い伝説的なエンジンにジョージ・ワシントン橋を渡らせる(*渡す)ことがいかに大変だったかという裏話を、ユーモアたっぷりに公開した。(スイングジャーナル青春録)

(23) 秦の始皇帝が不老長寿の薬を探しに臣下の者を日本に渡らせた(*渡した)。(添乗員疾風録)

ただし、通る場所が水の上であれば、「船頭は観光客を向こう岸まで渡した」と他動詞を使うことができる。

3. 1. 4 「泊まる・泊まらせる／泊める」

自動詞「泊まる」は「旅行の途中で、よその家や旅館などに宿泊する」意であるが、他動詞「泊める」の意は「人を宿泊させる」

人に宿を貸す」であるため、使役者の所有ではない宿の場合、(24)のように「泊める」を使うことができず、自動詞使役形「泊まらせる」が必要である。(二家族をホテルに泊まらせる／*家族をホテルに泊める)

(24) (私は) 昨年の娘の(センター試験の)時は京都大学が会場だったので、大学近くのホテルに泊まらせた(*泊めた)。(朝 二〇一七・七・二二)

一方、相手が泊まる場所が使役者が所有する所であれば、(25)のように自動詞使役形「泊まらせる」も他動詞「泊める」も使用できる。

(25) その夜はじめてお方は朝之助に無理強いして自分のところに泊まらせる(泊める)わけだが(略)。(前田愛著作集)

(26) 全国各地の(競歩)選手たちが教えを請いに訪れた。斉藤さんは自宅に泊まらせ(泊め)、熱心に技術を教え込んだ。(朝 二〇一七・五・二七)

3. 2 ・他動詞に語義的対応がある場合↓他動詞を用いる

・他動詞に語義的対応がない場合↓自動詞使役形を用いる

3. 1との相違点は、他動詞に自動詞の意味があれば、他動詞のみを使用し、自動詞使役形が使われない点である。つまり、対応する語義の有無によって、自動詞使役形か他動詞かが選択される。

3. 2. 1 「詰まる・詰まらせる／詰める」

「中に物が多く入っていきまがなくなる」意の「かばんに本が詰まる／かばんに本を詰める」、「短くなる」意の「丈が詰まる／丈を詰める」は、他動詞に自動詞に対応する意があるため、(27) (28) のように他動詞を使用する。自動詞使役形を用いることはできない。

(27) 引越しするので、かばんに本を詰めた(*詰まらせた)。

(28) ズボンの丈が長かったので、丈を詰めて(*詰まらせて)履いた。

一方、(29) (30) の「管状の通路が通じなくなる」意は他動詞にないため(二血管が詰まる／*血管を詰める)、自動詞使役形が用いられる。

(29) 日焼け止め化粧品は、毛穴を詰まらせて(*詰めて)しまっておそれがあるので、ニキビのときは、ほおぐらいにしておいて。(レタスクラブ)

(30) 魚に含まれる良質の脂肪酸やアミノ酸が、高血圧や高脂血症、さらに血管を詰まらせない(*詰めない)ので心筋梗塞や脳卒中などの血管障害を防いでくれるのです。

(カスビ海ヨーグルトの真実)
なお、「詰まらせる」には「言葉／声を詰まらせる」のような再帰的用法の慣用表現が多く見られた。これらも「*言葉／声を詰める」とは言えず、自動詞使役形の用法の一つであろう。

(31) 火事現場近くに住む男性は「消防車のサイレンで目が覚めた。普段はのどかな場所なのに」と言葉を詰まらせた。

(朝 二〇一八・二・九)

(32) ソニー本社で開かれた会見で壇上に立った平井一夫社長は時折、声を詰まらせつつ振り返った。

(朝 二〇一八・二・三)

3. 2. 2 「届く・届かせる／届ける」

「物などを先方におくる」意の「荷物が届く／荷物を届ける」は、他動詞に自動詞に対応する意があるため、(33) のように他動詞を使用する。自動詞使役形を用いることはできない。

(33) 私は友人に土産を届けた(*届かせた)。

一方、(34) (35) の「達する」意は他動詞にないため(二投げた石が対岸に届く／*投げた石を対岸に届ける)、自動詞使役形が用いられる。

(34) (筒香選手は) 同点4号2ランを右翼席の最上段まで届かせた(*届けた)。(朝 二〇一七・五・二四)

(35) 「プロ化」は競技レベルを世界のラインに届かせる(*届ける)ためにも、もはや待たなして(略)。(スポーツマネジメントの時代を迎えて)

このように、他動詞に自動詞の持つ意があるとき、3. 1の自動詞使役形と他動詞の両者が使用される場合と3. 2の他動詞のみの場合がある。その差異を考えてみると、3. 1は「立つ、回る、渡る、泊まる」の意志的動詞、3. 2は「詰まる、届く」の無意志的動詞と分類される。しかし、今回の調査では意志的な自動詞の「乗る、起きる、集まる」の使役形「乗らせる、起きさせる、集まらせる」の用例を見つけることができず、「乗せる、起こす、集める」の他動詞が多用されていた。したがって、この差

異を意志的自動詞か無意志的自動詞かによると結論づけることはできず、今後の課題としたい。

また、3. 1において、自動詞使役形と他動詞の両者が使用できる場合、その意味の差異はほとんど見られないと思われる³³。次の3. 3では、他動詞に語義的対応があっても、自動詞使役形に他動詞とは異なる用法が見られる例について考察する。

3. 3 自動詞使役形と他動詞の用法の相違

自動詞使役形でなければ表せない状況について考察する。

3. 3. 1 「苦しむ・苦しませる／苦しめる」

他動詞「苦しめる」の意は、自動詞「苦しむ」の意、「肉体的に痛みを感じる、つらい思いをする」に対応しており、(36) (37)にはその差異はほとんどないと思われる。

(36) いまだに何故彼が亡くならなければならなかったのか、
明確にならないことが私たちを苦しませつづけています。
(あなたの知らないトヨタ)

(37) 原爆を落とし、いまもなお被爆者を苦しめつづけている
者をこそ責められるべきです。(朝 二〇一八・二一・二二)

しかし、(38) (39)は他動詞「苦しめる」では不自然である。「苦しめる」意は「苦しみを与える、困らせる」であるため、患者に対して苦しみを与えるという表現が相応しくないからであろう。このような文脈では、自動詞使役形を用い、「痛みを感じる」ことを「させる(させない)」という表現のほうが使役主(動作主)の意志的動作ではなく間接的な印象になる。

(38) 「病院には一つだけ条件を言っている。(私を)絶対に苦

しませないで(*苦しめないで)逝かせてくれ。葬式も葬儀屋と段取りや料金を相談している」

(39) 「患者のあなたへ、自分の身は自分で守る」「患者さんを苦しませて(*苦しめて)はならない」(中略)等々の先生のお言葉。
(生きかた上手)

3. 3. 2 「沈む・沈ませる／沈める」

他動詞「沈める」の意は「水中に没するようにする」であり、(40) (41)のように意志的に直接「魚礁」「マイク」を沈める動作を行う場合は「沈める、沈ませる」の差異は見られない。しかし、(42)の砂が自然に沈むようにする、(43)の温暖化の影響で海面が上がりがその結果、国が沈んでしまうというような、意志的ではない場合は「沈ませる」が適切であり、他動詞「沈む」に言い換えることはできない。

(40) 岡山市南区と玉野市にまたがる児島湖の水質改善につなげようと、県は貝殻を使った魚礁を沈め、テナガエビを増やす実験を始めた。
(読 二〇一八・七・三)

(41) 彼女は、水を張ったガラスやセラミックボウルのなかに水中マイクを沈ませて、それで音をつくる。

(42) ひじきは、たっぷりの水に入れて砂などを沈ませる(*沈める)。
(飯もの)

(43) 「キリバス、ツバルが国を海に沈ませない(*沈めない)戦いに敗れたとしても、フィジーは見捨てない。両国の人々

に恒久的な避難場所を与える」(朝 二〇一七・九・一二)

3. 3. 3 「進む・進ませる／進める」

他動詞「進める」の意は「前方へ行かせる」「程度・段階などを高度にする」であり、(44) (45) (46) のように意志的に進める動作を行う場合は「進める、進ませる」の差異は見られない。しかし、(47)「動脈硬化」(48)「認知症」のように状態が望ましくない方向に進行する場合は、意志的に「進める」他動詞より、自動詞使役形「進ませる(進ませない)」のほうが適切である。

(44) 政府が進める政策について、野党は具体的な対策を示さなければならぬ。(読 二〇一八・一〇・三〇)

(45) 田舎で病院を営む父は、映画評論家を目指したいという彰の将来の夢を無視して、強引に三浪してまで医学部に進ませたのだったが(略)。(潮のわかれ)

(46) 今、夫と二人暮らしになってみて、仕事を進ませるといふ点での多少の障害以外は、何の問題もないが、(略)。(今日を楽しむ！)

(47) 冠動脈の一部を治療しても、根本的な治療を行ったわけではありません。再発する危険性はあるのです。動脈硬化を進ませない(？進めない)ためには運動が大切です。(読 二〇二二・七・三三)

(48) 私のところではMIC(軽度認知障害)の方々に対して認知症へと進ませない(？進めない)ことを目標に、筋トレやデュアルタスクなどの運動のほか(略)。(産 二〇一八・一・一九)

以上のように、他動詞では意志的動作となり、それが相応しくない状況では、自動詞使役形が用いられることが分かる。

また、意志的か否かではないが、間接的な表現(指示をしてさうさせる)の例として「人を並ばせる」が挙げられる。他動詞「並べる」は「列を作るように位置させる」意で、「並ぶ」と対応している。例えば、「母は私たち姉妹を並べて背丈を比べた」「先生は生徒を一列に並べた」のように直接「人を並べる」という表現は可能である。しかし、実際の用例では(49) (50) (51) のように「人を並ばせる」が用いられており、「人を並べる」に言い換えることはできない。「並べる」を用いると、「本を並べる」のように物を扱うような印象を受ける。この点は青木(一九七七)が指摘しているように、他動詞を人間が客体である場合に用いると高圧的雰囲気さえ生ずるからであろう。

(49) こっぴどく叱られるものと思っていたら、先生は「よし、皆外へ出なさい」と校庭に(僕たちを)並ばせた(*並べた)。(父の失恋 娘の結婚)

(50) (容疑者7人は)一回三千元で雇った百人以上のホームレスを東京ドームの発売所に並ばせ(*並べ)、前売り券九十五枚、総額約三十七万円を購入した疑い。(新潟日報)

(51) 共産党が前面に出すぎると、保守層が離反しかねない。民進党幹部は道連にこう指示した。「しばらく候補者を共産党幹部と並ばせる(*並べる)な」

一方、(52) (53) のように人を並べることを戦略として表す場合は他動詞を使用し、自動詞使役形に言い換えられない。

- (52) この試合、楽天は2〜4番に外国人野手3人を並べた
 (*並ばせた)。(朝 二〇一七・四・二)
- (53) 誰かに頼った時点で攻撃は単調になり、チームスポーツ
 のおもしろさは半減する。ACL準決勝で強力なブラジル人
 を前線に並べた(*並ばせた)上海上港もそうだった。

(朝 二〇一七・一〇・二二)

このように、自動詞と他動詞が語義的に対応していても自動詞使役形と他動詞に用法の差が生じる場合がある。

4. 複合動詞などで形態的な対応を用いない場合

最後に複合動詞などで形態的対応を用いない場合について見ていきたい。2. 1. 1で述べたように(10) b. の「教科書を置いて帰らせる」を「置いて帰す」に言い換えることはできない。「置く」のも「帰る」のも生徒の動作であり、それを先生が「させる」意だからである。そのため、後ろの自動詞の使役形が必要となる。

- (54) (西山容疑者は) 新人のアルバイトなどに、「代金は明日振り込むと聞いている」と説明させて車だけ置いて帰らせ、そのまま代金を払わないこともあったという。(産 二〇一六・一一・一一)

- (55) (部活指導者が生徒に) 試合に負けたら学校に戻ってから100本ダッシュ、隣の試合会場から走って帰らせるといった話も少なくなかった。(朝 二〇一八・九・一六)

また、このような動詞の連続だけではなく、複合動詞の場合に

も自動詞使役形が必要である。例えば「持ち帰る」「響き渡る」「思いとどまる」「浮かび上がる」の後項動詞には、対になる他動詞「帰す」「渡す」「とどめる」「上げる」があるが、前項動詞・後項動詞の2つの動作の主体は同一であるため、後項動詞を他動詞にするのではなく、例えば「持ち帰る」ことを「させる」↓「持ち帰らせる」とする。

- (56) (大家選手は) 宣言した。「チームに必ず金メダルを持ち帰らせませす。それが私の五輪です」(読 二〇一六・八・四)
- (57) 一八七七年4月28日の筑紫新聞では、戦いに加わろうとする薩摩の女性が島津久光が思いとどませた、という記事も掲載されている。(朝 二〇一七・一一・二三)

さらに、(58)「歌声」(59)「筋の通ったところ」のように対象が無情物で、自動詞を他動詞化する場合であっても、他動詞「響き渡す」「浮かび上げる」ではなく自動詞使役形を用いる。

- (58) (合唱団「MODOKI」は) 押し寄せるような重厚な歌声を会場に響き渡らせ、「3年連続日本一」こそ逃したが、荘厳な空間を作り出した。(朝 二〇一七・一一・二七)
- (59) ヴィオレッタ役フランチェスカ・ドットはこの多面的なヒロインのうち、官能的というよりは、けなげで筋の通ったところを浮かび上がらせた。(朝 二〇一八・一〇・一一)

このように、動詞の連続や複合動詞において、自動詞使役形は大きな役割を担っている。

5. おわりに

以上、自動詞使役形の用法について他動詞との差異を中心に考察した。その結果、①「上がらせる／上げる」「帰らせる／帰す」のように語義が同じでも、文脈によって使い分けが見られること、②自動詞と他動詞の語義的対応がどうであるかが重要であること、③他動詞の直接的、意志的動作が適切ではない場合に自動詞使役形が使用されること、④複合動詞などの後項動詞には自動詞使役形が使用されることが分かった。

今後の課題としては、語義の対応がある場合に、自動詞使役形と他動詞の両者が可能な動詞と他動詞のみが可能な動詞の傾向を見るのが挙げられる。また、早津(二〇〇四)の指摘によると、日本語には人の心理的・生理的变化を表す他動詞が少なく、その代わりに「悲しませる、嬉しがらせる、悩ませる」などの使役表現が活発に用いられているという。この点をさらに調査し、自動詞使役形の用法の理解を深めていきたい。

注

- (1) 取り上げる動詞は、許(二〇〇九)、藤井(一九七二)、川端(二〇一八)を参考にした。
- (2) 許(二〇〇九)の調査結果によると、対応のある一二語の他動詞は約7億あったのに対して自動詞使役形は約4万5千で、自動詞使役形の使用率は他動詞に比べて非常に少ない。しかし、早津(二〇〇四)は、少ないとはいえ、使役動詞による表現の方がより適切である事態があり、それがどのような事態か興味深いと述べている。
- (3) 自動詞使役形と他動詞の差異がほとんど見られない、あるいは

は指摘するのが困難である例として、「役立たせる／役立てる」「煮立たせる／煮立てる」「慣れさせる／慣らす」「緩ませる／緩める」などがある。

参考文献

- 青木伶子(一九七七)「使役―自動詞・他動詞との関わりにおいて―」『成蹊国文』10 成蹊大学日本文学科学研究室
- 安藤節子・小川譽子美(二〇〇二)『日本語文法演習 自動詞・他動詞、使役、受身』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(二〇〇二)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井島正博(一九八八)「動詞の自他と使役との意味分析」『防衛大学校紀要 人文科学分冊』56
- 井上和子(一九七六)「変形文法と日本語(下)」(須賀一好他(一九九五)『日本語研究資料集 動詞の自他』ひつじ書房所収)
- 小川譽子美(二〇〇二)「自動詞使役文の諸相」『横浜国立大学留学生センター紀要』8
- 川端芳子(二〇一八)「自動詞使役形について―他動詞との比較を中心に―」『立教大学日本語研究』第25号
- 許永新(二〇〇九)「日本語における有対他動詞と有対自動詞使役形の使い分け」『東京大学言語学論集』28
- 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭編(二〇一一)『新選国語辞典第九版』小学館
- 定延利之(一九九二)「SASEと間接性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 佐藤友哉(二〇一七)「を」使役文と「に」使役文―意志動詞との関連と意味的差異」『国語国文』第86巻3号

鈴木容子 (二〇〇七) 「使役的他動詞文の成立条件」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部56
寺村秀夫 (一九八二) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

早津恵美子 (二〇〇四) 「使役表現」『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店

早津恵美子 (二〇一五) 「日本語の使役文の文法的な意味―「つか

いだて」と「みちびき」』言語研究』東京外国語大学148

藤井正 (一九七二) 「日本語の使役態」『山口大学教育学部研究論叢』20巻1号

藤井正 (一九七二) 「広げる」と「広がらせる」』山口大学教育学部研究論叢』20巻1号

【用例出典】

朝：朝日新聞インターネット版記事

産：産経新聞インターネット版記事

読：読売新聞インターネット版記事

KOTONOH A 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言で検索 <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

「教育再生―」戸塚宏 (二〇〇三) ミリオン出版

「広報いず」二〇〇八年12号 (二〇〇八) 静岡県伊豆市

「情事の終り」グレアム・グリーン／田中西二郎 (訳) (二〇〇五) 新潮社

〇〇五) 新潮社

「H a n a k o」二〇〇一年4月18日号 (二〇〇一) マガジンハウス

「恋人よ」藤堂志津子 (二〇〇三) 講談社

「流水」菊地慶一 (二〇〇四) 響文社

「親と園児の『運動会』感動必勝マニュアル」佐藤雄一 (二〇〇二) 講談社

「ベストの文化誌」蔵持不三也 (一九九五) 朝日新聞社

「老いてこそ人生」石原慎太郎 (二〇〇二) 幻冬舎

「スイングジャーナル青春録」中山康樹 (一九九九) 径書房

「添乗員疾風録」岡崎大五 (二〇〇五) 角川書店

「前田愛著作集」亀井秀雄 (一九八九) 筑摩書房

「レタスクラブ」(二〇〇三) S S コミュニケーションズ

「カスピ海ヨーグルトの真実」家森幸男 (二〇〇二) 法研

「スポーツマネジメントの時代を迎えて」杉山茂 (二〇〇五)

創文企画

「あなたの知らないトヨタ」伊藤欽次 (二〇〇五) 学習の友社

「生きた上手」日野原重明 (二〇〇三) ユーリーグ

「『飯もの』147の作品」読売新聞社編 (一九九八) 読売新聞社

社

「潮のわかれ」瀬口黎生 (二〇〇三) 鉾脈社

「今日を楽しむ―老いの満足生活」岡田信子 (二〇〇四) 大和書房

書房

「父の失恋娘の結婚」大林宣彦 (一九九五) フレーベ館

「新潟日報」新潟日報社 (二〇〇四) 新潟日報社

(かわばた よしこ) 本学講師)